

〈講演2〉

いま、先生は一過酷な、しかし人を惹きつけてやまない仕事―

朝日新聞編集委員 氏岡 真弓

朝日新聞の編集委員、というよりはアイデンティティとしては社会部記者のつもりでいます。氏岡真弓と申します。よろしくお願いたします。

尾木先生。教育の取材を始めたときから私の先生は尾木先生だと思っています。尾木ママになっても尾木先生と呼ばせていただきます。その尾木先生から、「先生が語れない」という強烈な話がありました。何度もうなずいて、本当にそうだなと思いました。

でも、私は新聞記者ですので、語れない人に語らせるのが仕事です。その仕事をグループでやったのが、『いま、先生は』という朝日新聞で出したこの本です。

これはおととしの夏、朝日新聞の社会面で連載した「いま、先生は」という記事に加筆して本にしたものです。この本に出てくる先生たちのお話をしながら、先生という仕事は今、どんなところに置かれているのか、なぜ語れないんだろう、どうすれば語れるようになるのかな、本当にドツボの話ばかりだろうか、その中にちょっとでも希望の話がないかな・・・などのお話を、うまくいかないと思いますが、してみたいと思います。

(1) 大津のいじめ事件のなかで

事件について先生たちに語ってほしい。大きな事件があるといつもそう思います。今回の大津の事件についてもさんざん探しました。しかし、私の探し方が悪かったと思うのですが、授業でやった先生が現在の段階では見つかっていません(※このシンポジウム後、い

じめについての授業実践が9月以降各地で続き、記事にしています)。

何で授業をしないのか聞きました。事実認定ができていないから。学校や教育委員会が批判されているから生徒に言いにくい、というのです。本当かと思いました。私たち教育班のやっているツイッターでも、いろいろなブログを見ていまして、子どもたちは猛烈にいじめ問題にアクセスをしています。その子どもたちの揺れを考えたときに、これを教室でやれない日本の学校って何なのかなととも思いました。

それはたぶん、一人ひとりの教師を責めてもしょうがないんじゃないかな、先生たちだけを責めてもしょうがないんじゃないかなというのが私の考えです。その話をしていきたいと思います。

朝日新聞の朝刊の1面で、ずっと「いじめられている君へ」「いじめを見ている君へ」「いじめている君へ」という、子どもたちに向けての識者の方々のインタビューを載せています。私は、山本シュウさんというラジオDJ、46歳の話を書きました。

彼は今、全国こども電話相談室の後継番組の「全国こども電話相談室・リアル!」という番組で子どもたちと番組を作っています。尾木先生が先週、コラボで出られたその番組ですが、彼はこの件でいてもたってもいられなくて、取材を申し込んだら即OK、朝日新聞にすぐ行くよということで、車を飛ばしてきてくださいました。彼は綿々といじめられている子に発信をしてくれました。

私が一番驚いたのは、彼は自分のメールア

ドレスを朝日新聞に載せてくれと言うんですね。実は携帯電話の番号も載せてくれと言われてたんです。「でも、携帯電話を載せたらもうパンクするし、シュウさん、それに応じられなかったらどうするの。携帯電話は難しい」「残念、痛恨です」とシュウさん。そんなやりとりをしました。

では、メールアドレスは。こちらも載せたら必ず返信できると言えるのか。シュウさんにとって、大変なことになるのでは。そして新聞社にとっても、読者に責任をとりきれるか。それでも彼は言いました。「どんなに遅れても、俺は一人ひとりに答える」。

先生に必要なのはこの熱であり、子どもたちに何とか答えてあげたいという気持ちだと思います。そういう声をもっともっと日本の学校から起きてほしい。この大津の事件を見て強く思います。しかし、できない事情もある。その話をします。

(2) 教育現場の変化を追って

今日のサブタイトルは、「過酷な、しかし人を惹きつけてやまない仕事」です。今の先生の仕事を一言で言うと、こうなる。これはバクリなのですが、私、すごくいい表現だと思います。

このタイトルをつけてくれたのは、『いま、先生は』の本を作ってくれた岩波の編集者、田中朋子さんです。この言葉は表紙の折り返し部分に出てきます。彼女が書いたのはこういうコピーです。「早期退職を選ぶベテラン、力尽きて過労死するもの、心を病むもの、病から復帰するもの、迷い苦しみながら仕事を覚えていく新人たち・・・教師という過酷な、しかし人を惹きつけてやまない仕事の現在をあぶりだす。この事態を打開する解はないのか」。

実はこれ、前段階があります。岩波のPR紙に、彼女がやっぱりコピーを書いているん

ですね。最初、書いてくれたのは「教師という過酷な仕事」というそれだけ。「これでもいいかな、氏岡さんどう思う？」「これでもいいよね」と2人でやりとりをしていたときに、でも、大切な言葉を忘れていた、と彼女が挿入したのが「魅力的かつ」という言葉でした。

「教師という魅力的かつ過酷な仕事」。過酷が先なのか、魅力が先なのか、結構微妙なところだと思いますが、それを入れてくれた。そうして本では「過酷な、しかし人を惹きつけてやまない仕事」。

取材していて思うんですけども、過酷であることと人を惹きつけてやまないという、ちょっと見ると反対のように見えることが、実は今、日本の先生の中に同居しているんじゃないか、と思います。逆に言えば、人を惹きつけてやまないから、ますます過酷になるし、過酷だけどそれでももっているのは、人を惹きつけてやまないということ。この二つの間で、きっと先生たちの気持ちは振り子のように揺れているのではないかなと思います。

自己紹介代わりに自分が書いてきた記事を挙げます。ずっと私は教育の担当をしていたわけではありません。新聞社は事件や事故のサツ回りというのをしますし、高校野球の担当もやりますし、選挙の担当もやります。教育の専従になったのは96年ごろ、社会部に来て、オウム真理教の取材を終えた後、そのあたりに尾木先生に初めてお目にかかっていると思います。

どういう記事を自分が書いてきたか。98年に学級崩壊の話を書きました。主人公は苦しんでいる崩壊学級の先生です。02年になると、ゆとり教育の学習指導要領のもと、構造改革特区や地方分権、教育改革がどんどん進んでいく。04年ごろになると、特に東京ですけれども、団塊の世代が大量に退職して行って、若い先生が入ってくる。その若い先生ってどんなことを感じているんだろうというのを記事にしました。

06年、今度は、学校を回っていますと、非常勤の先生、パートの先生が増えだした。何でこれに気が付いたのかというと、習熟度別の授業をどうやっているのかなといくつかの学校を回ったんですけれども、放課後、取材をしようと思っても、授業をやっている先生はいないんです。「あ、〇〇先生、帰りました」「え、何で帰っちゃうの？」というわけです。非常勤の先生がいると知っていたんですけれども、こんなに帰っちゃう先生が多い。その先生は帰りたくて帰っているわけじゃなくて、1時間1時間を請け負っているからそうならざるを得ないのですが、この非常勤の先生という存在はどうなんだろう、この先生たちの思いってどうなのかなと思ったのが06年ごろで、連載しました。

そして10年、先ほどの企画の「いま、先生は」というのを仲間と試みました。その間どんどん進んできたのは、先生のパート化であり、職場に若い先生たちが増え続けたということだったと思います。

(3) 教育改革＝教師改革

その間のことをちょっと振り返ってみたいと思います。一言で言うなら「教育改革＝教師改革」。私が、先生を好きだからさっきのような記事をたくさん書いたわけではなくて、やっぱり先生が焦点だったからそうになっていたのだと思います。

この15年の大きな波は、教育改革という教師改革だったと思います。

その一つの始まりが、尾木先生が「大阪よりすごかった東京都改革」とおっしゃいましたが、東京都。97年ごろから東京都の教育委員会はものすごく大きな改革を始めます。その一つが、97年に東京都が指導力不足教員認定制度というのを作ったことだと思います。それから、ますます東京都は改革に走り、2000年には人事考課制度を作って、先生たち

をS、A、B、C、Dの5ランク、今は4ランクですけれども、これで評価する制度を作ります。

東京がやると不思議に全国に広がる。安倍内閣のときの教育再生会議では教育の3つの法律が改正され、その中に指導力不足の認定制度というのが位置付けられます。さらに、教員の免許更新制。さっきのお話にも出てきましたが、これがスタートする。

民主党に政権交代してもこの波は止まりません。ますますスピードアップをしているし、「あれ、更新制見直すって言ってたんじゃないの」と思っても、更新制は今もそのまま、この夏休みも先生たちは講習を受けている。

ついこの間は、免許を4年じゃなくて6年以上で出しましょうよということで、修士レベルの免許にしましょうという中教審のまとめがありました。先生たちの免許を3種類にして、4年の基礎免許と、それ以上の6年ぐらゐの一般免許と、専門免許の3つにしようというのです。果たしてこれができるのかどうかよくわかりませんが、依然として教育の改革は先生を中心に、ぐるっとしたコンパスのように動いていて、そのコンパスがどんどん加速しているというふうに見えます。

何でこうなったのか。はっきり言って、教師への逆風の時代が続いているからだと思います。

教育を変えようとする、一番は教室で子どもたちに接している先生です。ただ、この改革が先生を応援しようという方向ならいいんですけれども、どちらかという、問題点を見つけてチェックするという感じです。

教員組合はもちろん分裂して組織率はどんどん低くなりましたし、教育の本は読む人がいなくなりましたから売れなくなったし、民間の教育サークルについては参加者が減っていきます。その背景には、やはり人々の公立学校への批判や、教師への批判の大きな声があったと思います。今の天津も私はそうだと

思います。

私もさんざん教師の批判と学校の批判の記事を書いてきました。でも今、ふと立ち止まります。自分の書いていたことは間違っているとは全然思っていません。ただ、教師だけを責めて済んだでしょうか。もっともっと大きいことが、教師を中心に社会全体に起きていたんじゃないか。社会、地域、家庭はどんどん変わって行って、しんどくなっていった。その複雑な構造をどこまで自分は見ることができていたのかなという反省が私の中にあります。

学級崩壊の投書を集めた本に書いたんですけども、「教師はやっぱ教室の火元の責任者」。文字どおりそうなんです。教室の中の出来事はすべて、一義的に教師が責任を負います。でも、原因はすべて教師だろうか。もっといろいろなことが組み合わさっているんじゃないかな。当時の私が今ここにいて仲間だったらきっとそう言うだろうなと思います。その中で自分が出会った先生たちの話をします。

(4) 学級崩壊のなかで

最初、取材したのが学級崩壊でした。私の教師の取材の出発点です。90年代末、当時はいじめや不登校、むかつき、キレるとか、子どもの問題行動が教育問題の中心でした。そのころ、教室が荒れるという話を聞いて、じゃあ荒れるんだったら、荒れた教室の先生に話を聞こうと。まあ、新聞記者だからそう思って訪ねていきます。しかし、この取材がすごく大変で、会ってくれないし、会えるような状態ではない。もう精神的にぎりぎりの状態になっている。回復した先生でも会ってくれない、話してくれないんです。

それは、そうだと思うんですね。さんざんその前に新聞記者が先生をたたいているので、また会ったらたたかれるかなと思うから

話したくないというのもある。ただ、ぜひ話していただきたいと思って、さんざんいろいろな先生の心のドアにノックをし続けました。

その中で一人、「まあ、いいかも」と言ってくれたのが、アツシ先生としておきますが、北海道の小学校の先生、当時 37 歳でした。彼にぜひ話を聞きたいと思ったのは、学級崩壊のプロセスを膨大なメモにして残していたことです。メモ魔で逐一残していた。ぜひ話を聞かせてくださいということで、北海道に通いました。

取材したのは崩壊した 2 年後ですけども、そのノートを先生は開けたことがないんです。当時のことを振り返って話すのは初めてといえます。すごく苦しくて、インタビューをしても、どんどんしゃべる口調が早くなって、メモがとれない。そのぐらい苦しかったということなんだと思います。

「とんでもない学年」の 3 年生を先生は持ちました。メモには「1 日に 100 件トラブルが起きるクラス」と。実際、100 件あったかどうかわかりませんが、確かにものすごく細かい字でそのトラブルの内容が書いてあった。子ども同士のつかみあいとか、何でも「先生、先生」で解決しようとするとか。それから、今の問題になっているいじめの問題。ハブるとか、靴を捨てるとか、いじめの問題もありました。

先生はこのクラスを、ルールを決めることで何とか立て直そうとするんです。クラスで問題があったら、いっぱいルールを決めて。

4 年生になったときにそれでうまくいくかと思っていただけで、ここに転校生がやってきます。ルールなんか全然知らない転校生がやってきて、平気でルールを破る。そうすると、子どもたちは「何であの子はいいのに私たちは我慢しなきゃいけないわけ」ということで一気にクーデターが起こって、この学級が無政府状態になります。

今まで子どもたちがクラスというコップに

ためにためてきた鬱憤とか、もやもや、我慢する気持ちが一気にはじけ、水がどつとあふれる。どんなことになるのか想像がつくと思っています。

そして、ここが問題なのですが、この先生は教頭先生に SOS を出して、「助けてくれ」と言うんです。「保護者会を開きたい」と言うんですが、「いや、問題はまず先生が解決してください」と言われてしまう。職員会議でもこの先生の崩壊の様子は話されなかった。保護者会も開くのは駄目と言われる。他の先生もこの先生が苦しんでいるのは横目で知っているのに、何かあのクラスうるさいなと思っ

ていても、助けてあげられない。孤立無援。その中で、ある日、子どもたちが先生に暴力をふるって、先生の眼鏡が飛んで割れるということがありました。子どもたちは反アツシで結束をして、クラスは完全にコントロールできなくなる。

やっとこのときに教頭先生が、「じゃあ、保護者会を開きましょう」と言うことになる。もう、先生、ぎりぎりなんですよね。保護者会を開いて、先生は「助けてください」と訴えます。そうすると、親御さんたちは子どもたちにも話し、教室にも入ってきて、先生を助けるようになる。

ようやく少しずつ、少しずつおさまっていく。先生のノートには大きく「指折り数えて春を待つ」と書いてありました。何とか3月になだれこんで、先生は子どもたちを卒業させる。取材に対して、先生はその過程を何日にもわたって、猛烈なスピードでしゃべり続けました。

最後にこの先生がおっしゃったことは、私にはものすごく印象深いです。「いろいろな問題点はある」。彼は実践家なので、いろいろな原因を分析してくれました。最後に言ったのが、「あのね、先生が無条件で信頼された時代は、もうとっくに終わりましたから」。この一言です。

今振り返るととても大切な言葉だったと思います。教師の黄金時代は終わった。先生といえば、昔は尊敬されていたし、親も子どもも絶対的に信頼を寄せていた。そういう時代が終わって、その象徴が学級崩壊だというわけです。

それは同時に、先ほども尾木先生がおっしゃったように、先生が多くの子どもに一斉に知識を伝え、子どもはちゃんと受けとめるという放送型の授業が音を立てて崩れていったのが、やっぱり 90 年代以降だったと思います。

それは同時に、いい成績をとって、いい学校に入ればいい企業に入れ、幸せになれるという学歴神話の崩壊だったと思います。学校というカードが幸せのすべての物差しになるのか、そうじゃないだろうと皆が感じ始めた時代だったとも思うのです。

でも、そういう社会であっても、やっぱりこの学級を統治できなかったのは、学級の王様のあなたの責任でしょうということで、担任は指導力不足教員としてレッテルを貼られて評価されていく。その苦しさを崩壊学級の先生方のお話から感じました。

当時、いろいろな先生の話を知りました。学校で学級崩壊の話を知った先生は一人もいません。どこで聞くのかというと、だいたい学校とは全く路線の違う駅を選ばれて、小さな店だとばれちゃうし、保護者に見られたくないし、ファミレスで話を聞きます。

だいたい「30分ぐらいでいいですかね」と話は始まるのですが、平均して4時間。一番長い先生は、朝10時に始まって、閉店時間の夜11時までずーっと話し続けるという状況でした。しかも、私はほとんど質問していないんです。先生の一人語りです。

何でこういうことになるのか。「職場で話を聞いてもらったことありますか」「そんなことできるわけじゃないじゃないですか」「何で私に話せるわけですか」「新聞記者さんは別に 1

回だけだし、僕と一緒にいるわけじゃないし」。「話し相手としていいということですか」「かえって安心できます」。で、ほとんど質問なしで先生がしゃべり続ける。

私はこれ、学級崩壊の先生の特徴だと最初は思っていたのですが、いろいろ先生の取材をしていると、それが学級崩壊の先生の特徴じゃなくて、ひょっとしたら、今の日本の多くの先生の特徴ではないのかなというふうになるようになりました。

(5) 若い教師の増加と多忙

この15年間に起きてきたのは、2つの構造変化だったと思います。

一つは、若い先生が増えてきたこと。静かな構造変化です。先生の人口ピラミッドはワイングラス型といわれています。50手前からぷくっと膨らんでいるのがわかったと思います。

ちょうどワイングラスのワインが入るところが膨れて、その下の持ち手のところが膨れかけているのがわかっていただけだと思います。これが都市部で今、もう都市部以外のかなりのところでも広がっていますが、若い先生が増えている現象です。

子どもの数が増えた時代に大量に採用されたのが50手前の先生のところなのですが、今、その先生たちが退職し、その代わりに若い先生が増えているという構図です。

でも若い先生が直面するのは、50手前の先生が見ている世界とは大きく違ってきます。もう教師の黄金時代は終わっているのですから。

そこで、神奈川のタロウ先生の話をしたしたいと思います。タロウ先生は28歳。お父さんも先生なので、教師の世界をよく知っています。お父さんの背中を見て育った。そして、横浜の小学校の先生になります。

印象的だったのは、彼が嬉しくて恩師の先生に「僕、小学校の採用試験に受かったんで

す、先生になるんです」って言ったら、その恩師の先生は突然暗い顔になって、「タロウ君、無理をしないでね、無理しちゃ駄目よ、いろいろなことがあるかもしれないけど頑張っただけでね」と。言われたタロウ先生は、俺は喜んで報告しに行ったのに、何でこんなに暗い顔で恩師は言うんだろうと思ったんだそうですが、その恩師の言葉はまさに的中することになるという話です。

先生になってたちまち彼が直面するのは忙しさの渦で、本当に何をしていたかわからなかった。

この学校は大津の学校と一緒になんですけれども、研究授業を引き受けていて、研究のスケジュールがどんどん入ってきます。だから先輩に聞こうと思っても、大量の仕事先輩が持っていて、もう背中が忙しいと言っている。だから聞けない。「教師って授業をするのが仕事だ」と彼は思っていたそうですが、「書類を作るのが仕事だった」と彼は感じます。よくわからないのだけれども見よう見まねでやる。だから、どんどん失敗をして、やり直すけど、繰り返して失敗をする。

取材では4月の数週間でやったことを挙げてもらいました。名前のはんこを押す、ロッカー・下駄箱・荷物のフック用の名札、特別教室の配当表、時間割、非常時の保護者引き取りカードを作る、パウチする、代理人用を作ってもらうのを忘れて、また作り直すとか。

なかでも学級の書類作りや管理が大変だった。学級経営案、教員評価の自己観察書、授業の評価書、健康手帳、PTA書類、個人情報取り扱い承諾書などなど、学校は猛烈な文書の渦。生徒から集める文書の場合、これがそろっているかチェックをして、ないと一軒一軒電話をしたり、遅れると、また管理職から言われたりする。「はっきり言って、教師は事務屋ですよ」と彼は言いました。

そこで、こういう紙の作業って、「じゃあ、ほっぽるとけばいいじゃない」って新聞記者

の私は思うんですが、いや、とんでもない。締め切りが来て「〇〇先生出してません」と言われるから出す。その作業に追われて一番おろそかになっているのは何なのかといったら、授業です。授業の締め切りはありませんから、適当にやったってばれない、と。

彼に「どういう授業の準備やったの？」とたずねると、朝7時ごろ来て、赤本、指導書をばばばっと開いて、「あ、うん、うん、これで授業できるな」と。そして教室に行く。「授業研究ってやったの？」「そんなのやる暇ありませんよ」。こういう具合です。

じゃあ、夜何時ごろ帰っていたのかというと、書類作りも大変ですし、猛烈に会議が多い学校だったので、校務もあるし会議もあるしで、だいたい夜9時ごろまで。そのときに職員室に何人の先生が残っていたかということ、10人ぐらい残っていたんだそうです。

「じゃあ、食事はどうしてたの？」というところ、コンビニで弁当買って下宿に帰ってバタッと寝るって日々だった。「土日は休めたの？」というと、「とんでもない。地域の行事とかお祭りは全員参加だし、若手は出ることになっている。さばれませんから」。なので、ほとんど1年間、彼はろくに休んでいなかったということになります。

体は悲鳴を上げるし、頭はずきずきするし、肋間神経痛になるし。ひどいなと思ったのは、先生になるとときには視力が1.0あったのが、1年間で0.4に落ちたそうです。10メートル先に立っている子どもの顔が見えない。

職員室で愚痴を言うと、「タロウ、また始まったよ」と言われる。「じゃあ、職員室の先生、何話してたんですか」というと、「子どもの悪口」。「ええっ、周りをねぎらったり、ほめたりということはなかったわけ？」「いや、皆全力疾走で、そんなことできませんよ」。

彼は結局これ以上続けると自分が壊れちゃうと異動届を出して、別の町に行った。そうしたら、これ、「同じ日本の学校？」というぐ

らいすぐくゆっくりで、校務も少なくって研究授業もなくて、子どものことを第一に考えられる。さっきの尾木先生の「評価試行中」で評価を先伸ばした学校みたいなものだと思うのですが、つまり授業に集中できた。

じゃあ今振り返って、最初の学校って彼にとってどんな意味があったのか。彼の言葉ですが、「何かを得たというより、あれ僕、修行でした。どんなことがあっても僕はへこたれないという、その極限状態を経験した修行だった。あれに比べたら、これからどんなことがあっても僕耐えていけますから」。これが、若手として育てられているという感覚を持つ学校なんだろうか。とんでもないなと思いました。

ベテランの先生もきっと苦しいんだと思う。でも、どうしてもベテランの先生って、自分の経験でしゃべってしまう。教師の黄金時代ですので、「親と飲み会してはどうですか」「サークルに行つてはどうですか」。こういうことを言われると、この若い先生は「わかっちゃないなあ」と思うらしいんですね。「そもそも今の学校に先生の数がなくて、校務分掌もろくに回っていないのに、何で行けるかよ」という感じ。どちらかというと、独身の若手の先生にハードな校務分掌が回ってくる。

そうすると若手の先生、「何で俺らばかりやらなきゃいけないんだよ」と。そんな気持ちが増えるということなんです。

そんな中で、亡くなった一人の先生の話をしたと思います。おととい、皆さんもご覧になったかもしれませんが、東京高裁で一つの判決が出ました。どういう判決かということ、新採6カ月で、自家用車の中で焼身自殺をした静岡県磐田市の先生のお話です。

この先生は公務災害が認められなくて、控訴審の判決があって、結局、裁判所は公務災害であるという判断をしました。木村百合子さんの事件です。

この取材をしていて私が一番驚いたのは、

裁判を傍聴していて、木村百合子さんが6カ月間、ずっと彼女のクラスの状況を保健の先生に勧められて書き溜め、ある先生に渡していたんですが、それを管理職は見えていなかった。原告側の弁護士はそれをぜひ管理職の先生に見てほしいと、管理職の先生が証言に立つ1週間前に自宅に送ります。

しかし、原告の弁護士側が「先生、僕が送ったあの資料、見てくださっていますか」と法廷で聞くと、その先生は平然として「封も切ってません」「ええーっ」という声が法廷内に広がりました。

自分の部下が自殺をされていて、もし仮にそのときに見ていなかったにしても、自分がその法廷に立って証言に立つときに、その資料が送られてきたら普通は封を切るでしょう。読まなくても封を切ると思うのですが、封も切ってないという。これは何なんだろうと。まさに、先生たちが自殺をしていく学校の、一つのものすごく荒れた風景を、私はこの法廷で見た気がしました。

(6) 非正規の先生

もう一つの構造変化は、先ほども言いましたように、非正規の先生が増えたということです。非正規は大きく分けて2種類。フルタイムだけど、1年、半年契約の常勤といわれる先生と、あとは、1コマずつのパートの非常勤の先生と、その2種類があります。

いったい何人の先生がいるのかなと思って調べてみました。ところが、文部科学省は人数がわからなかった。正確に言えば、その先生たちが何時間持っているのかという統計はあるのですが、果たしてそれが何人の先生が持っているのかという計算をしていなかった。つまり、先生の頭数ではなくて、時間でしか見ていなかったと言われても仕方ないかもしれません。

私はその先生一人ひとりのことがとても大

切だと思い、何人その先生がいるのか、もう一回計算をし直しました。計算してみると、あっとびっくり、常勤、非常勤合わせて7人に1人です。今はもう6人に1人になっています。

ところが、その他に教員補助員というかたも実は現場にはいます。免許を持っていてもお手伝い。そういうことからすると、非正規の中でも、さらにパートの先生、その外に補助員の先生ということで、非正規化が進んでいる。今の社会の一つの写し絵だと思います。

どうしてこうになってしまうのか。やはり自治体はお金がない。少人数指導をやりたいと思っても、先生が少ないなら安い先生を雇うというわけです。じゃあ、自治体が悪いのか。そうじゃないです。やっぱり後押しをしていたのは、文部科学省というか国だったと思います。

自治体が少人数学級を作りやすいように規制を緩めるというのは、それは私はOKだと思います。けれども、予算が増えません。お金が増えなくて、少人数指導や学級を作りやすいようにしました、と言われたときに、どうするか。当然そのお金を小分けで使って先生の数を増やそうとする。それは自治体側にとっては道理だろうと思います。

そのときに、ある自治体の担当者が言ったのは、こういう言葉です。「自由になったけど、それは正規を抑える自由。厳しい中、正規を増やす自由は僕らにはありませんから」ということです。「正規を減らして、給料を下げる自由を僕らが手に入れた」。自由っていいことなのか、マイナスの自由ってひどいんじゃないのとそのとき私は思いました。

さて、もうひとり。イサオ先生は、「いま、先生は」の連載をしたときの反響メールに激しい言葉で反論してきた人です。「登場している教員は皆正規だ。つらいと言ってもらっては困ります。彼らを支えているのは私たち講師です」という激しい言葉から始まる手紙で

す。

会いに行きました。28歳。さっきのタロウ先生と同じ年。千葉県内。やっぱりファミレスです。路線外の私鉄沿線の駅のファミレスで、この先生の場合には6時間コースだったと思います。彼、そんなところでも小さな声になりまして、「学校に不利なことを言うと、次の年、使ってもらえないかもしれません。これ冗談半分ですけど、結構本気です。ある意味、僕ら微妙な立場ですから」。

8時に出勤して、早いと3時間目までなんですけれども、日によっては5時間目まで学校にいる。職員室には机がなくて、空きスペースで、こそこそと指導書を開けている。「じゃあ、早く終わったら帰ればいいですよ」と言う、「いやいや、指導書は学校にしかありませんから」。塾にバイトに行くギリギリまでそれを読んでいるということです。

「でも、パートなんだから割り切って授業だけやって、さよなら、とはいかないんですか」と言ったら、「自分には意地がある」と言うわけです。パートの先生に教えられたからこの学級は点数が低いと言われたくない。そもそも子どもがかわいそうだ。

わかってないなあという子どもの顔つきをみると、その子が「うん、うん、うん、わかった!」と言うまで教えてやりたくなる。そうすると、自分の授業以外はお金が出ないのに、彼はいちいち職員室に呼んで、また空き教室に呼んで指導しちゃうわけです。それをやっているとなすすまぬ採用試験には受かりません。

東北の小さな市の出身なので、お母さんからは何度も「戻っておいで」と手紙が来ます。でも、東北はまだ、さっきのワイングラスの取っ手の部分のところが増えていない。つまり、若手の採用が広がっていないので帰れない。ギリギリまでやって体を壊す。その連続です。

でもこれって、さっきのタロウ先生の話に

似ていませんか？ 正規と非正規といっても、そっくりです。彼いわく、「正規の先生が大変なのは、すごくわかります。でも、僕からすると甘えていると思う。全員がギリギリまで働いているわけじゃありません。生徒が落ち着いて楽な仕事をしている、そういう学校には正規の先生が行きます。大変な学校は非正規が見ます。うちらはしょせんコマですから」とか、こういう言葉が取材でぼろぼろ出てくる。同じ職員室にいて、この断絶って何なんだろうと愕然とします。

でも、彼には意地がある。「俺ら体を壊すと終わりですから。正規の先生には代わりが来るけど、代わりの僕には代わりはありませんから」。

その先生のアパートに寄って本を見せてもらいました。採用試験の本はあるにはあるのですが、本棚の半分ぐらい。あとは、授業書、指導研究書がぎっしり詰まっています。

つまり、いかに彼が非正規でいても自分の授業を大切に子どもたちを大切にしようとしているか、その本棚を見て痛ほど伝わってきました。やっぱり彼は、残念ながらその後も採用試験に落ち続けます。今も非正規です。

(7) 教師の困難

今までお話ししたのは2つの断層の話でもあります。2つの構造変化は2つの断層を生みました。若手とベテラン、正規と非正規ということです。その背景にあるのは、やりがいという名の多忙です。

ベネッセの調査がありますけれども、中学校の先生が1日の学校にいる時間を1980年と2007年で比べたときに、80年は9時間59分、ざくっと10時間。それが、27年後は2時間近く延びる。睡眠時間はどうかというと、7時間8分から5時間57分ですので、1時間ここでカットです。やっぱり激しく減るのが

読書。尾木先生は市民的な生活が必要だとおっしゃり、私もまさにそうだと思うのですが、教師の現実、読書は80年は1時間17分できていたのが、32分です。これで人間教師がやれるかと。そもそも人間をやれるかということだと思います。

病休のグラフ。99年は4,470人、この数字もすごいですが、2008年になると倍近くになり、今は倍を突破しています。特に大変なのが精神疾患です。99年度から10年間で、一気に3倍です。

今、文部科学省はメンタルヘルスの検討会議というのをやっています。傍聴していますが、先生たちが心を病んだときにどのように対応するのかというのを、お医者さんや民間会社の専門家たちがやっている。でも、そもそもそういうギリギリの状況を生む構造の議論まで突っ込まずに、どう対応するかという話をしている。「これでよくなるかな、なるわけないな」というのが私の感覚です。

では、先生をめぐる状況がよくなりさえすればいいわけ？ というと、なかなかそうもいかない。ここまでつらさを生むものを追いかけてきたけれども、それらはやっぱり学校は社会のしんどさの玉突きではないでしょうか。その中で、先生の数を文部科学省は増やそうとしているんですけども、極めて厳しい。

この間、少人数学級の会議を傍聴していたのですが、ある日、出てきたのは、財務省の教育担当の主計官です。彼が訴えたのは、いかに教育にお金がつけられないのか。彼が30分話した中の20分間は日本全体の財政赤字の説明です。「皆さん、日本はギリシャになっていいのですか。極めつけは「皆さんの借金というのはこの子たちが背負うんですよ。それでも教育に金をかけろと言うんですか」。

私は見回して、誰か反論してほしいと思ったのですが、どの委員も反論してくれないのはすごく悲しかったです。彼が退場するとき

に何人かの委員が拍手を送ったのには言葉を失いました。

教育現場はどういうことになっているのか。不登校の子は93年から今までに、小中とも2倍です。暴力行為は2006年から4年間で、小学校は1.8倍で中学校は1.4倍です。

すごく大変なのは、裕福ではない家庭。要保護、準要保護の子は95年から2010年まででやっぱり2倍。保護者のリストラなどのしんどさが、いかに学校に玉突きのように寄せられているのかのデータだと思います。

今、学力と言われていますが、もうすでに学校の役割は、偏差値を上げるというような悠長なことだけではないかもしれません。子どもの命をどう守るか。それが学校の役割になっているように感じます。

社会のセーフティネットをどのように張って、子どもの命や暮らしをどう守っていくのかという最前線が、今の学校だと思います。

そういう中で、教師だけが気張ってももう駄目だろう。福祉の人、労働の人、そういう専門家と、どのように外と広く連携していくのか、親と手をつないでいくのか。今までの黄金時代のように、偉い専制君主のように一人で全部仕切るなんて、もう思っちゃ駄目だろう。どうやってチームで動いていくのか。課題は中学校だけではなくて、幼稚園も小学校も中学校も高校も、そして大学もそうですが、どのようにしてチームとして力を出していくのが今求められている。

「いま、先生は」の連載の話に戻します。ちょっと違う風の匂いを私は感じています。

この連載をするときに社内では異論がありました。教師がしんどいという話をして、読者からどんなパッシングを受けると思いませんか。先生はまだ恵まれているでしょう、何で朝日新聞が教師の味方になるのかという議論がありました。

もちろん批判はたくさんいただきました。しかし、予想以上ではなかった。教師への批

判は意外に少なく、自分のつらさと重ね合わせた投書が結構多かった。教員批判一辺倒だった世の中が、ちょっとずつ、ひよっとしたら変わってきているかもしれない。ここはすごく大切なポイントだと思っています。

じゃあ、教育現場は駄目か。いや、捨てたものではない。しんどさを乗り越えようとする動きがあります。若手の先生の中で、東京では学びをつくる会の「学びのWA」というサークルがありますし、滋賀では、「(仮)センセの放課後」という不思議なタイトルのサークルがあります。土曜日の朝、先生の自宅でやっています。「(仮)」というのは、本来は職員室に放課後があるべきなただけでも、そこがないから「(仮)」。というわけで、ケーキを食べながらしゃべっています。とってもしなやかで、まったりで、議論というよりもお互いのつらさを語り合いながら、正解って何かなと探っていく会です。そういう小さな会が各地でぼつ、ぼつ、ぼつとできつつある。

もう一つは正規と非正規の断層を埋める集会在、このところ2つぐらい出てきて、これって、とても希望が持てることではないかと思っています。

やはり私は、学校は希望であってほしいと思っています。

(8) 3・11の現場から

最後に震災について触れたいと思います。

3月11日のあの日、多くの人が向かったのが学校だという意味をもう一回捉えなおしたい。避難所が学校だったというところもあるんですけど、そうではないところの学校にも地域の人たちが助けを求めて来たんです。先生たちは自分の家族も忘れて避難所運営をしました。

そういう学校が震災から立ち上がったときに何が起きたか。すべてそぎ落とした中で何が大切なのか、先生たちは考えました。

ある校長先生はこう言いました。「校長の花道があると思っていました。研究指定を受けて、得意分野でまとめる。でも僕、3月11日のあの日、それはものすごく間違っていたと思う。もう僕は子どもが生きてさえくれればいい。自分の学校の子が全員助かったと聞いたときに、ああ、もうこれが俺の花道だと思った」と言うんですね。

間借りの学校では職員室はありませんので、校長先生が西日の当たる廊下の端っこで執務をしていたり、校長室がありませんから職員室で一緒にいたりして、とても和気あいあい。評価制度もありません。学級、学校経営もありません。校務分掌、ありません。職員会議もなし。

やっぱり、あの日、私は学校は何が大切かと確実につかみとったんだと思いたい。やっぱり、命なんだと思います。

ところが、今どうなっているのか。昨日も私、石巻に行ってきたんですが、3つの統廃合される学校の先生たちに話を聞いてみると、もう元どおりです。教育委員会から何を言われているかということ、授業時数を確保せよということ。きっちり学力をつけなさい。指導要領も守りなさい。震災に負けない教育をと言われていました。

でも、震災に負けない学校、震災に負けない教育とは、本当に何でしょう。あの原点を気付かせてくれた出来事を、今ものすごい勢いで忘れてるんじゃないかなと思いました。

宮城の亘理の中学校、ここには尾木先生もいらっしゃったと思います。その中学校にいらっしゃる森先生が作文の授業をやった記事を書きました。

この記事に反響のお手紙が全国各地から5、6通来ました。「涙が出ました」「先生が元気で良かった」「自分も、と奮い立ちました」。かつての教え子です。

これは何を意味するのか。やっぱり先生の仕事はにわか結論が出るものではなくて、

ずっと教え子を励まし続ける。それが先生という仕事の人を惹きつけてやまないゆえんだし、ぜひ日本の先生にはそのことは忘れないでほしいし、これからもそうしていついていただきたい。

私も学校に希望を探す取材をしていきたいと思います。

以上で終わります。ありがとうございました。(拍手)

※2012年9月20日「いじめ、みんなで考えた」／2012年11月24日「高校生、勇気のメッセージ」など。いずれも朝日新聞教育面。